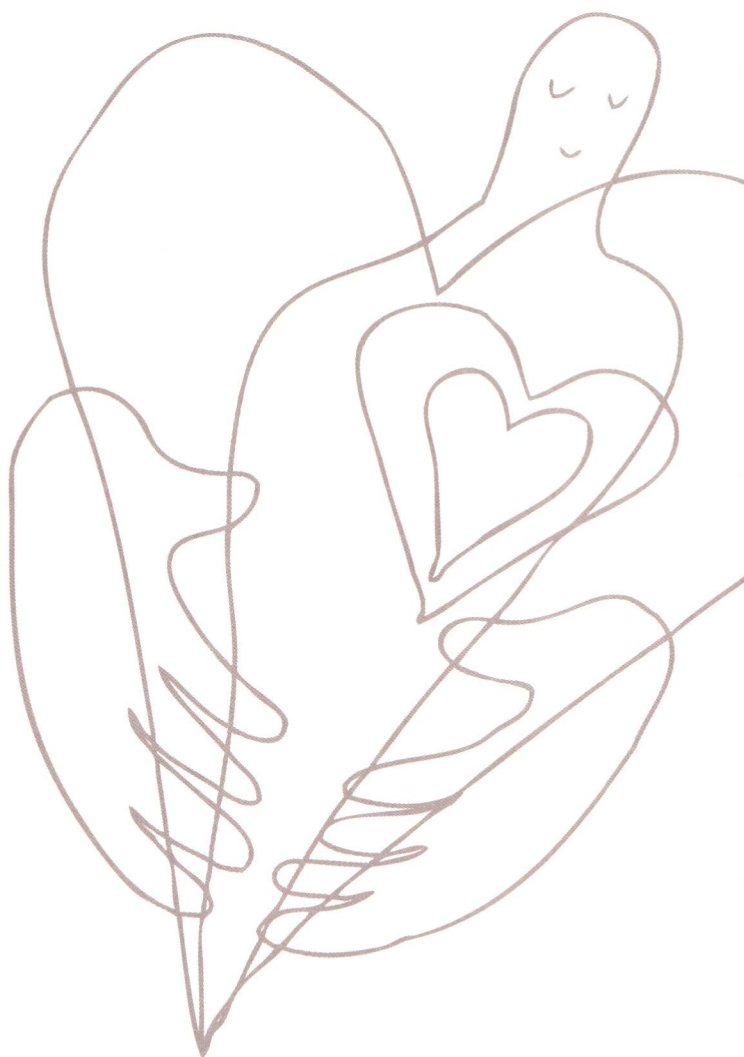




文部科学省私立大学  
戦略的研究基盤形成  
支援事業採択



今年は秋の到来が早い気がします。

9月6日（日）に第9回シンポジウム「戦争体験の記憶と語り」を開催しました。

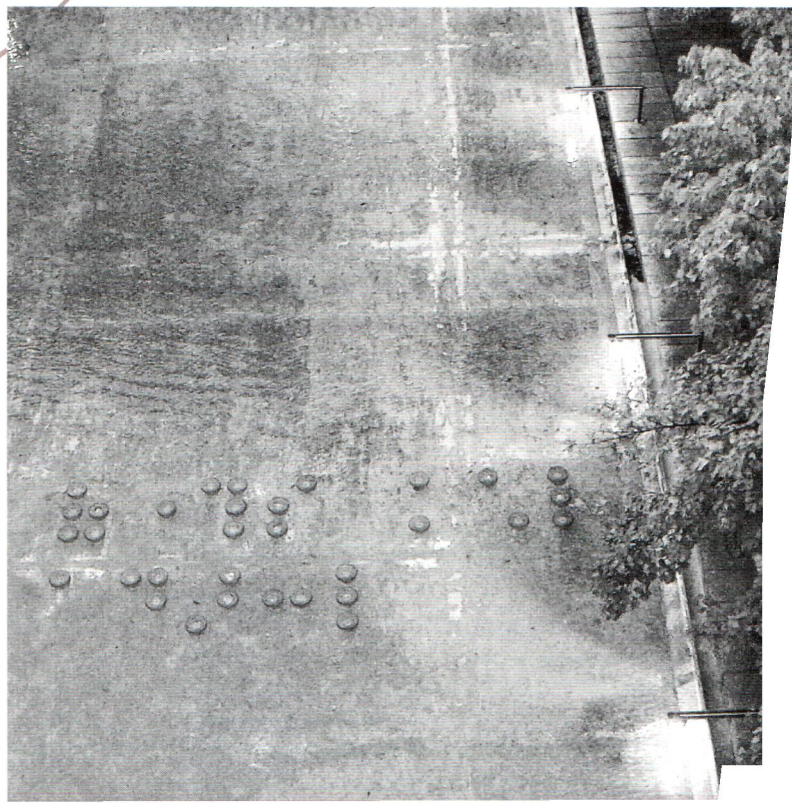
プロジェクト1ですすめている加害—被害関係の多角的研究の一環である戦争体験の記録・継承についての歴史学的・心理学的からの研究報告に加え、研究者と市民が多角的な視点で戦争体験を考えることをめざして、

「神戸空襲を記録する会」の代表や新聞記者もまじえ、戦争体験を記録、継承することの意味を考えました。

当日は、戦争体験者を含む約100名の参加者を迎え、それぞれの講演ののち、活発な討議と質疑応答がかわされました。お忙しい中ご来場いただいたみなさま、ありがとうございました。

今後の研究の大きな刺激となりました。

これからも引き続き、ご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。







プロジェクト2では研究の一環として「父親の子育て」の研究に取り組んでいます。今回は西宮市の男性保育士第1号として活躍され、ご自身3回の育児休暇をお取りになった小崎恭弘先生をお迎えして、「父親の子育て、父親にしかできない子育て」というテーマでご講演頂きました。また、第2部として、当研究所の研究班が行った父親へのインタビュー分析結果を報告し、小崎先生やフロアからご意見を頂戴しました。フロアには地域で子育て中の父親の皆様もお越しくださり、活発な議論が交わされました。

まず、第1部は「今“父親”がブームである」という小崎先生の言葉で口火が切られました。ドラマで“父親”が取り上げられることが増え、海外セレブが“父親”をやっていることをアピールするようになる中で、父親が以前に比べて随分育児の情報を手に入れやすくなってきています。しかし、日本の現状に目を移すと、まだまだ男性は旧来の文化に縛られており、育児から男性を排除する意識が色濃く残っています。実はこの「縛り」が男性の生き方の幅の狭さ、辛さを生んでいるのかもしれない。このワークライフバランスの悪さを是正し、男性の生活の質を上げるという視点で父親の子育てを捉える必要があるのではないかと考えて、氏はファザーリング・ジャパンの立ち上げ、パパパ検定制作などの活動をしてこられました。

では、「父親の子育て」とは何でしょうか？ 育児はビジネスモデルであり、男性が仕事でやっていることを妻と子を対象に行うのだと氏は言われます。妻と子が望むことを調査して（顧客のニーズを調査）、達成目標、計画を立てて実行、そして大切なのは子どもの気持ちや妻の不満を聞いてやること（顧客管理、クレーム処理）なのです。そう考えてみると、父親は家事を手伝えればいいと思いがちですが、それは子育てのほんの一部でしかありません。妻たちが夫に切に求めているのは、育児に関心を持ち、その大変さに共感してくれることなのです。一方、子どもはというと、実は子どもも二人目のママを必要とはしていません。子どもは「快」、「安心・安定」、「興味・関心」を与える親の関わりを通して「包まれる安心感」と「取捨選択する力」のバランスをとれるようになります。その中で「興味・関心」を与える役割を担い、多様性を与えて選ぶ力をつけさせるのが父親であり、子どもが父親に求めているのは、母親だけの育児にはないものを与えてくれる存在なのだとは氏は考えておられるようです。

父親が子育てをすること、父親が母親のようになることは違う。この点が「父親もできる子育て」から一歩進んで、「父親の子育て・父親にしかできない子育て」なのではないか？ というご示唆をいただいたご講演でした。

第2部では、父親インタビューの概要が紹介され、3つの視点から分析した結果について中間報告がなされました。

まず、「父親が子どもと出会うこと、子どもへの気持ちの変化」については、出産に立ち会うことが父子関係に影響するとは言えず、子どもを身近に感じられるようになるまでにかかる時間には個人差があることが報告されました。また、「子育ては楽しいですか？」という質問に対する語りから窺える父親の子育て意識では、母親インタビューでは「楽しくない」と回答した人はおらず、様々なニュアンスがありつつも「楽しい」ことが否定されなかったのに対して、父親の回答には「楽しくない」から「楽しい」までバリエーションが見られたこと、また自分がしているのが子育てと呼べるものなのか？ という回答が特徴的であることが述べられました。最後に「父親にしかできない子育てとは？」というテーマについては、子育てに積極的に関わっている父親でさえも授乳に関しては母親にかなわないと痛感しているようだとも報告され、この「かなわない」という感覚によって、父親が子育てから一歩引くことになっているのかもしれないという考えが述べ

## プロジェクト2 育てる関係の危機と子育ての意識の多相性についての研究

### 第46回 父親の子育て 父親にしかできない子育て



日 時：2009年6月20日(土)13:00～16:00  
場 所：甲南大学18号館3階講演室  
講 師：小崎 恭弘

(神戸常盤大学短期大学部／児童福祉学)

発表者：新道 賢一 濱田 智崇 川口 彰範  
企画・司会：高石 恭子

(甲南大学／臨床心理学、学生相談)

られました。

これを受けた質疑応答では、「子育てを楽しむよい父親像」が一人歩きすることで、父親の子育てのハードルが上がってしまうのではないかという意見や、もっと人間としての父親の実態に焦点を当ててほしいという要望が述べられるなど、活発な議論が交わされました。

今後、この研究会でいただいた小崎先生をはじめとする父親の皆様のご意見を活かして、子育て中の父親の実態や内的体験をありのまま捉える研究を進めていきたいと考えています。



## プロジェクト4 心理療法の現在に関する検証

—臨床と研究の即応的関係の構築—

# 「若手臨床家の事例の読み方」 に関する調査



日 時：2009年6月28日(日)10：00～18：30

場 所：甲南大学18号館3階講演室

企画・司会：穂苅 千恵 (甲南大学／臨床心理学)

司 会：高石 恭子 (甲南大学／臨床心理学)

〈調査参加者〉

調査協力者：資格取得後5～10年のキャリア  
をもつ臨床心理士30名

事例提供者：高島 光恵

(佛教大学学生相談室／臨床心理学)

コメンテーター：岡野 憲一郎

(国際医療福祉大学／精神医学)

田中 康裕 (京都大学／臨床心理学)

森 茂起 (甲南大学／臨床心理学)

臨床心理士資格が生まれて約20年を経た現在、まだ途上にあるとはいえ、心理療法ならびに心理療法的視点からの支援の試みは日本各地に浸透し、それぞれの現場で日々臨床に携わっています。資格制度開始当初には臨床心理士による支援がほとんど導入されていなかった現場においても、少しずつですが着実に心理療法および心理療法的対人援助が展開しています。例えば、児童生徒が通う小中学校、福祉支援による育成の場である乳児院や養護施設、ニートからの脱出を支援するさまざまな就労支援機関、子どもと離れて暮らす高齢者や介護を必要とする高齢者の生活施設などがそれにあたります。これに伴い、それぞれの現場において常に新たな実践上の問題が発生してきており、従来の方法論ではとらえることのできない、個別的課題に直面しています。そこで、現代の臨床の実情と今後の姿を明確化していくことを目的とし、その端緒として行われたのが、今回の「若手臨床家の事例の読み方」に関する調査です。

これまで臨床心理士の養成のあり方としては、事例検討を通して実践的な技能を身に付けさせることが中心でした。そのため従来の事例検討会では、その事例ごとにクライアント(被支援者)の変化の過程を分析し、臨床心理士(支援者)の働きかけとの相互作用を考察することを主たる目的としています。この種の事例研究はこれまでの20年間で養成機関や臨床現場のいずれにも定着し、すでに相当数のデータ収集と議論が行われています。しかし、資格取得後に心理療法家としての自立に至る要因分析、すなわち専門家としての視点や発想の成熟過程についての研究はほとんど行われていません。そこで、われわれは従来の事例検討会とは異なった、調査と事例検討の要素を併せ持つ「事例研究会」を開催して、現代の社会における臨床心理士の視点形成の様を検討したいと考えました。ここには、心理療法が対象とする問題の把握とともに、臨床心理士が社会で活動し、専門家として定着していく過程で起こるさまざまな困難や課題を分析することも問題意識として含まれています。

以上のことから、約1年間かけて、実際の事例を元に、臨床家の視点を読み取るための4つの切り口から構成された調査用紙を作成し、大学院修士課程修了後、一定のキャリアをもち、専門性を確立しつつある全国の臨床心理士(資格取得後5年以上10年未満)を30名選定を行いました。そして2009年6月28日、心理療法におけるさまざまな事象に関してセラピストひとりひとりの感じ方や考え方を、インタビューではなく記述形式で収集することを目的とした調査を行いました。第1部ではまず、調査参加者が一堂に会し、事例が提示されました。その後、30名の調査協力者は質問紙への回答を行いました。第2部では調査で得られた回答を集計したデータの一部を元に、3名のコメンテーターから意見を受けつつ議論を進めました。

現在、若手の臨床家が面接場面でどのような考え方や感じ方をしているのか、それらの特徴を分析し、心理療法における事例理解の「視点」に関する仮説生成のため、結果整理を行っています。

本プロジェクトでは、今後10年を見据えた、心理療法および心理療法的支援の課題、および臨床心理士の養成および研修の課題をまとめていく予定です。それらを、本学大学院人文科学研究科人間科学専攻における教育、実践内容に反映させ、大学院における臨床心理士養成課程の今後のあり方への提言に結び付けたいと考えています。



● これまでの活動

公開シンポジウム

プロジェクト1. 加害-被害関係の多角的研究

第9回 「戦争体験の記憶と語り」

日時: 2009年9月16日(日) 13:00~17:30

場所: 甲南大学5号館1階511教室

シンポジスト: 森 茂起 (甲南大学/臨床心理学)

東谷 智 (甲南大学/日本史)

中田 政子 (神戸空襲を記録する会)

指定討論: 中尾 知代 (岡山大学/ポストコロナリアルスタディ、  
オーラルヒストリー)

野上 元 (筑波大学/歴史社会学)

司 会: 森 茂起 (甲南大学/臨床心理学)

企 画: 森 茂起 (甲南大学/臨床心理学)

● これからの活動

公開研究会

プロジェクト1. 加害-被害関係の多角的研究

和解と赦し

第49回 公開研究会 2009年12月下旬(予定)

場所: 甲南大学18号館3階講演室

講師: 野上 元 (筑波大学/歴史社会学)

企画: 港道 隆 (甲南大学/哲学)

第50回 公開研究会 2010年1月下旬(予定)

場所: 甲南大学18号館3階講演室

講師: 北原 恵 (大阪大学/表象文化論、美術史、ジェンダー論)

企画: 港道 隆 (甲南大学/哲学)

プロジェクト3. 芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究

第47回 公開研究会 『障がい者の他者性と芸術表現』

開催日: 2009年11月7日(土)

場所: 甲南大学18号館3階講演室

講師: 知足美加子 (彫刻家・九州大学芸術工学研究院助教)

企画: 西 欣也 (甲南大学/文学・芸術理論)

研修会

第3回 思春期発達支援研修会・第48回プロジェクト2公開研究会

『共に考える子育て・親育ち』

—発達障がい児を持つ保護者の“親育ち”を援助するには—

開催日: 2009年11月12日(木) 16:30~19:00

場所: 甲南大学18号館3階講演室

講師: 高山 恵子 (NPO法人えじそんくらぶ代表/臨床心理士)

企画: 高石 恭子 (甲南大学/臨床心理学、学生相談)

南野 美穂 (甲南大学人間科学研究所リサーチ・アシスタント)

司 会: 南野 美穂

発行年月日: 2009年10月20日

編集後記

今回開催された公開シンポジウムの記録は、甲南大学人間科学研究所紀要『心の危機と臨床の知』vol.11(2010年2月発行予定)に掲載する予定です。

先日、映画『子供の情景』(監督:ハナ・マフマルバブ)をみました。舞台は、アフガニスタンのパーミヤン。イスラム原理主義勢力のタリバンによって破壊された仏像が残る、彼の地です。少年たちは、「タリバンごっこ」をして遊びます。その「タリバンごっこ」に、一人の少女が巻き込まれ、「拘束」されてしまうのです。巻き込まれた少女を助けるために、少女の友人の少年が発した言葉は、「自由になりたいなら死ね!」。(つまり、死ぬまねをしたら、「解放」してもらえるということ)。この台詞はあまりにも衝撃的です。わたしたちは突きつけられたこの台詞の重みを如何にして受

